

2021. 7. 18 (日) マタイ26:20~25

26:20 夕方になって、イエスは十二人と一緒に食卓に着かれた。

26:21 皆が食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。」

26:22 弟子たちはたいへん悲しんで、一人ひとりイエスに「主よ、まさか私ではないでしょう」と言い始めた。

26:23 イエスは答えられた。「わたしと一緒に手を鉢に浸した者がわたしを裏切ります。」

26:24 人の子は、自分について書かれているとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったです。」

26:25 すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが「先生、まさか私ではないでしょう」と言った。イエスは彼に「いや、そうだ」と言われた。

#### <説教>

受難週の木曜日の昼間、イエスが命じられたとおりにして弟子たちは過越の食事の用意をしました。(26:17-19)

〈夕方になって、イエスは十二人と一緒に〉過越の食事の〈食卓に着かれ〉ました。(26:20)

過越の食事の場では家の主人が家族の者たちに「過越」の由来を、すなわち神がどのようにしてイスラエルの民をエジプトの奴隷支配から解放してくださったかという神の救いのみわざを語り教え、屠られた子羊のこと、種なしパンのことなども語り教え、そうやって家族皆で神の恵みを思い起こしたのです。

「過越の食事」は単なる食事ではなく、神を崇め礼拝するときでした。

イエスと十二弟子の〈皆が〉そういう礼拝である〈食事をしているとき、イエスは言われた〉(21)ののですから、ここでイエスが弟子たちに言われたことは、いわば説教のようにお語りになったことだと言えます。

ここでイエスは真の過越の子羊であるご自身がどのようにして人々に引き渡されるかということを弟子たちにお教えになり、神のみわざを示し、同時に人間の罪を示し、自己吟味、信仰による悔い改めをお命じにもなったのです。

「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります(引き渡します)。」(21)とイエスは宣言されました。

これまでも何度かイエスのご自分が人々の手に、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されると弟子たちにお話しになっていましたが、ここでついに誰がその引き渡し(裏切り)をするのか、それは〈あなたがたのうちの一人〉なのだ、と明らかになりました。

イエスから特別に選ばれ、召され、イエスに一番近くあって、寝食を共にして、イエスの教えとみわざを他の誰よりもよく聞き、見てきた〈あなたがた〉十二弟子〈のうちの一人〉です。

もちろん弟子たち(イスカリオテのユダを除く)十一人にとってはイエスの言われたことはショックでした。

〈弟子たちはたいへん悲しんで、一人ひとりイエスに「主よ、まさか私ではないでしょう」と言い始めた〉(22)

「まさか私ではないでしょう」は直訳すれば「私であるわけがありません」となります（cf.7:16「茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか」）。

ですからここで弟子たちが「それはもしかしたら自分かも知れない」と不安になったと言えなくはないと思いますが、すぐ後で「たとえ、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」とペテロを初め皆が言った（26:35）ことを考えると、弟子たちそれぞれは「自分はイエスを裏切ることをするはずがない」と考えていたとも思われます。

もしそうなら彼らが〈たいへん悲しん〉だのも「俺ではない他の弟子のだれかがイエスを裏切る」と思っていたということになります（もちろんそれが自分の弱さ罪深さを知らない大変な自惚れ、自信過剰だったことが更に後に露わになります）。

イエスは「わたしと一緒に手を鉢（パンなどを浸すスープを入れた器）に浸した者（つまりわたしと一緒に今ここで過越の食事をしている者）がわたしを裏切ります」と言われました（23）。

そしてこれは〈自分について書かれているとおりに〉（24）のことだと言われました。

〈私が信頼した親しい友が私のパンを食べている者までが私に向かってかかとを上げます。〉（詩篇 41:9）と書かれているとおりでした。

「わたしは、あなたがたすべてについて言っているものではありません。わたしは、自分が選んだ者たちを知っています。けれども、聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かって、かかとを上げます』と書いてあることは成就するのです。」（ヨハネ 13:18）ともあります。

〈人の子は、自分について書かれているとおりに去って行きます。〉とはしかし聖書に書かれているから自分は諦めて運命に従うということではありません。

それは「神が預言者によって予め明らかにしておられた神の民の救いが、わたしが十字架につけられるために引き渡されることによってついに実現しようとしている」という宣言なのです。

先主日にも学んだようにそれは敗北宣言ではなく、イエスによる「過越」の成就、悪魔と罪と死に対する勝利宣言なのです。

もちろんいわば不意打ちをくらってしまったのでもありませんでした。

〈しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったです。〉と言われました。

ユダは神のご計画の成就のために貢献したのだから彼の裏切りについては寛大に見なければならぬ、ということは絶対にありません。

〈人の子を裏切るその人は〉「ああ！」（「わざわい」の直訳）〈生まれて来なければよかったです〉とイエスこそユダのことを悲しみ、嘆かれたのです。

ユダは自分の食欲に支配され〈イエスを引き渡す機会を狙っていた〉（16）のであり、他の十一人とは違って、誰がイエスを裏切るかを自分で知っていました。

しかしユダは他の弟子たちの口真似をして「先生、まさか私ではないでしょう」と言い放ったのです（25）。

ユダはイエスを裏切ろうという自分の罪をどこまでもイエスの前に隠し通そうとし、自分は裏切っていないかのように、イエスにそして「人に見せるために」こう言ったのです。

〈イエスは彼に「いや、そうだ（直訳「あなた自信が言った」）」と言われ〉ました。

これはひとえにユダに対するイエスからの最後の悔い改めの命令、促し、訴え、あわれみと恵みのみことばでもありました。

イエスはユダを他の弟子たちの前で恥をかかせようともなさらず、ユダも一緒に食卓に着くことをお許しになり、そうやってユダがこれまでイエスから受けて来た恵みの大きさを思い出させ、そして今犯そうとしている罪の大きさに気付かせようとなさったのです。

しかしユダはイエスのみことばを拒み、悔い改めることをせず、そうやってイエスに逆らい、聖霊に逆らう罪を犯し続けたのです。

私たちは「自分はひょとしてユダではないか」と思い煩ってはなりません（事実、ユダではありません）が、同時に神を侮ってはなりません。

私たちはイエスのみことばによって、今まで受けて来た神の恵みを思い起こし、今受けている、そしてこれからも永遠に受けると約束されている神の恵みに信頼し、イエス・キリストにある救いを確信し、それゆえに日々真剣に悔い改めるのです。